

その日は、冬とは思えないほど柔らかな日差しが町を包んでいた。
地図を広げなくてもわかる、見慣れた道を歩いていく。
ドアベルに手を伸ばし、この家に初めてきた春のことを思い返した。
チリン——。
涼やかな音が、冬の空気に響き渡る。
扉がゆっくりと開いて、そこには少しだけ驚いた顔をしたルルがいた。

「ただいま……って、言っているのかな」
「もちろんよ。……おかえりなさい」

扉が大きく開かれる。
中へ入るとあたたかかった。
まだ誰もいない待合室で、まっさきに伝えるべきことを話した。

「薬、飲ませたよ。母は寝たきりだったのが嘘^{うそ}みたいに、今、元気
にしてる」

「そう。よかったわ」

「改めて、あの薬のすごさを知ったよ。それで、両親には薬のこと
内緒にしてほしいって頼み込んだんだ」

「え？」

「それが俺にできる……ルルへの償いだと思った。それに、万能薬
を使うとき『内緒にしてほしい』って言われていたし。約束、守り
たかったんだ」

それほどたっていないのに、ふたりでフォルの対応をしたのが、も
う遠いことのように思える。

「正直に言えば、ちょっと……結構、心配していたの」

「そうだね。心配しないで。俺も家族も、秘密は絶対に守るよ」

「ありがとう」

ほほえむルルに、俺の言葉を信じてくれているんだと思った。
どうしてだろう。
俺は君に嘘をついていたのに。

「ルルはどうして——」



ツバメが言い淀む。
視線をさまよわせて、言葉を続けていいのか悩むように。

「なに？」

「どうして——俺を、信じてくれるの？」

「だって、もうツバメが嘘をつく理由はないじゃない」

「そうだけど……でも」

「私は許すって決めたの。あなたはこうして戻ってきてくれた。もう私たちの間に隠しごとだってない」

「……うん」

「私たちは今、まっさらな状態で向かい合っているのよ」

向かい合って立って、見つめ合って。

「疑うことなんて、なにもないじゃない」

そう伝えれば、ツバメの瞳に光が増した。

「俺……。俺さ」

ぐっと握り込まれた手に、視線が移る。

「ルルのそういうまっすぐなところ、好きだよ」

「え……」

「ルルのことが、好きだ。君がまぶしくて、羨ましくて、どうしようもなく惹かれてしまう」

ツバメの言葉が頭の中で響いている。

なにか言わなくてはいけないのに、言葉が出てこない。

「ごめん……。俺がこんなことを言う資格、ないよね」

「違うの！ そうじゃなくて……」

あなたの言葉が、こんなにも私に届いて。

こんなにも、胸を締めつける――。

「私も……」

手が、心が震える。

でも、あなたが伝えてくれたぶん……私だって届けたいから。

「ツバメが、好き……」

「ルル……」

ツバメが一步ずつ近づいてきて、大きな手が私の手を取った。

「本当はあの日、こうしたかった。許してくれた君のもとへ、行きたかった」

「ツバメ……」

「ルルの隣にいたい。そばに、いさせて」

じわり、涙がにじむ。

あの日だって、涙は出てこなかったのに。
私はただ、ただ……うなずくことしかできなかった。



うらかな春の陽気がクレールの町を照らす。

「たくさん買っちゃったわね」

「店主さんもおまけしてくれたしね。今日の夕食は豪華になりそう」

買ったばかりの野菜や果物が入った籠^{かご}をさげ、俺たちは静かな町並みに行く。

空いているほうの手で、ルルの手を握った。

少しだけ硬直する体に、思わず笑みがこぼれる。

けれども、そのあと——ゆっくりと指先が重なっていく。

「あ、あたたかいわね……」

ルルはそっぽを見ながら言った。

きっと、照れ隠しのだろう。

「そうだね。すっかり春だ」

だから、俺も春のせいにして。

光の中で、ふたりの影がゆっくりと寄り添っていった。

エンディング D 【歩幅を合わせて】